

検証

崩拓銀

< 8 > 10.10.14

という言葉が、だれからともなく出てきた。

深夜から十五日未明にかけて、大蔵省の中井省審議官ら幹部が同ホテルを訪れ、河谷ら拓銀幹部に決断を迫った。

中井 「どうですか、方針は決まりましたか」

河谷 「いたずらに混乱を招くような無責任なことほできません。営業を断念します。営業譲渡と日銀特融をお願いします」

この瞬間、百年近い拓銀の歴史に幕が下りることになった。

「資金繰りが大変です。重

大局面です。頭取にすぐ上京するよう連絡してください」

最期

昨年十一月十四日午後、拓銀の東京・企画部から本店に一本の電話が入った。東京本部では、資金証券部が週明けの資金調達の道を探っているころ、企画部は非常事態を想定して動き出していた。

河谷植昌頭取はすぐに新千歳空港をたち、東京・丸の内パレスホテルに入った。遅

れて武馬鋭弥副頭取、東京駐在の大野忠一副頭取も駆け

しかねません。そうなれば、手形の決済資金を用意できない企業が続出し、道内経済は大混乱に陥ります」

慌ただしく出入りが続くホテルの一室で、幹部が厳しい現状を説明した。「営業譲渡」

これを受け、大蔵省側は



日銀本店

北洋銀への営業譲渡を水面下で進めた

拓銀幹部のちに「あの電話ですべてが決まった」と振り返る。

蔵省から入った。

この夜は結論を持ち越した。

合併交渉での道銀との感情的なもつれを考えると、大蔵省の要請をすんなり受け入れるわけにはいかなかった。

河谷ら拓銀幹部は眠れぬままホテルで一夜を過ごした。

十五日朝になって、拓銀側は大蔵省に「道銀では（行内の）収まりがつかない」と電話で伝えた。大蔵省は假たんの迫った山一証券への対応などで幹部が忙殺されており、電話でのやり取りが続く。

その最中、日銀の本間忠世理事から拓銀に電話が入った。

「下まで一枚岩だ」

拓銀幹部はのちに「あの電話ですべてが決まった」と振り返る。

河谷はたち大蔵省で待機していた中井に電話をかけた。

翌十六日午後三時半、パレスホテルの九三号室、拓銀の取締役十一人が顔をそろえ、臨時取締役会を開いた。

「受け皿銀行は北洋銀で行ってほしい」と伝えた。同省もこの時点で道銀をあきらめ、北洋銀の説得に回る。

河谷は沈痛な面持ちながら、いつもと同じ淡々とした口調で説明を始めた。「このままでは当行の存続は困難であり、営業譲渡が必要です。受け皿銀行は北洋銀にお願いしました。財務内容が良く、道民の信頼度も高い。当局も了解済みです。私も専務以上の五人は退任します……」

実は、日銀は河谷らが上京する前日の十三日にも、拓銀に「決断」を迫っていた。

「日銀の担当者が電話で、本間理事からの伝言です。もう日銀は支援できない。営業譲渡を決断してください」といってきた。北洋銀の名前は出ませんでした。腹は分かりました。「拓銀幹部」大蔵省が道銀にこだわり続けたのに対し、日銀は早い段階で北洋銀に接触し、それなり

の感触を得ていたとみられる。

拓銀の「最期」を決める臨時取締役会は、わずか二時間ほどで終わった。

「敬称略、同書は当時」

（拓銀問題取材班）

混乱恐れ営業を断念

「（営業譲渡先は）道銀しかだが、河谷は「二晩考えさせよう」と切り出した。せてほしい」と即答を避け、進めてほしい。日銀は総裁が洋銀が応諾したとの連絡が大

「（営業譲渡先は）北洋銀で夕方になって、ようやく北

「敬称略、同書は当時」